



Title	附錄 石菴先生遺稿
Author(s)	吉田, 錦雄
Citation	懷德. 1940, 18, p. 1-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

石菴先生遺稿

石菴先生遺稿

吉田銳雄拾輯

萬年先生遺稿 〔中井竹山先生編〕

萬年先生遺稿序

嗚乎吾萬年先生。德之邵。學之邃。後學末易窺測也。仄聞先生蚤歲潛心於程朱之學。既而出入陸王。反覆沿泳。久而融會。就夫居敬之旨。立大之方。良知之說。棄短取長。矯偏扶正。蔚然集成一家。所謂內聖外王之學。於先生見之。世儒或以無所宗主。病先生者。要非知道者矣。比及晚年。從游日盛。聲號布聞天下。達於廟堂。立學之命。於是乎降就先生廬。設懷德書院。一世抃嘆。以爲曠世美事。然內未及明之於書。以嘉惠後進。外無由措諸事業。以鑄治當世。而先生暴歿。可勝嘆哉。平昔獨見超詣。得先賢未發之旨者。固不可枚舉。而其稍稍親錄者。府下甲辰之災。燐燼無餘。惜夫。是編也。令嗣春樓君。旁羅搜索者數十年。寸蒐尺輯。始克成卷。繼述之功。亦勤矣。編中所載中庸錯簡之說。及斥五行配當之非。因正四德加信。爲五常之誤。實祛漢唐以還。頑痼之惑。二千載之。

下數萬里之外。而學者始得知思孟之眞。唯此二說之功。亦爲雄偉無比矣。然其後吾蘭洲五井氏。亦自有五常之說。載之其質疑之篇。愚嘗爲之序。以發其蘊矣。其說與先生之旨。吻合無間。而亦不係勦竊也。蓋蘭洲之學。雖出於家承。而自夙齡廁先生門徒之間。則如五行之說。固已與聞其緒論焉。旣而蘭洲東遊。如先生五行辨筆之實在其後。蘭洲在東十餘年。學益進。乃就往日五行緒論。發揮立五常之說。時先生已有其成說。而蘭洲蓋不及知也。于嗟蘭洲之趣見。固出於先儒之上。然先生之發明。自不俟蘭洲之發揮而足焉。蘭洲之契悟。則特因先生之指授而後啓者。實不可誣矣。夫同一說也。而各載二書。蘭洲之於先生。既有函丈之契。則庶乎質疑有勦說。然質疑係其往時之親筆。是編出於今日之輯綴。則又似記者有誤傳。學者或將惑焉。是不可不辨也。審其巔末者。爲書院教授春樓君三宅某序。以詔後人者。爲助教中井積善。

萬年先生詩

題畫

風亂凍雲雪片飄。江城山郭一蕭條。無聊最有征人在。去一作偏看前村酒旆招。

中元中并斂菴看燈設二榻一席延余及同志坐啜茗晤語因作

葛衣郎對葛燈籠傍隔葭簾前竹櫈櫈外風流終底事葛衣郎對葛燈籠

斂菴前日之播摩州未歸

梅天雨未已驟士日西行庫海篷中思姬亭馬上情侵霧望龍野逆風入穗城定知歸府
日詩賦在囊盈

送騷客

麻衣携竹杖千里一身輕野徑花無語關山月有情沈吟過故阠一作國奇句動邊城我亦
四方客燕歌報楚聲

無題

日暮入城市山川望轉微可憐老樹外三五鳥一作鳥飛歸

冬菊

繁霜偏壓葉能綠凍雨屢過花自黃三月棣棠開四面皆應謂我丈人行

夏日喜雨

倦來日午手支頭。思在樹陰與水流。雲態變成雨脚下。滿庭景象早如秋。

山居

百尺崖頭三畝居。麻衣草食與僧如。偶隨溪水尋窮處。時向嶺雲唱步虛。

田園

梅子已黃瓜未甘。長堤斷塢土橋南。杖藜興盡欲歸去。復與隣翁隔竹談。

無題

近林風入遠林定。東嶺月兼西嶺新。遠近東西風月夜。閑堂只少一詩人。

古戰場

野叢茸茸一作漠漠水漫漫。獨立荒場冷眼。看金鏃終朽一作朽來黃壤。腥寶刀長沈一作沒去碧流寒。

赤心今作一作有冤魂滯一作在青血。夜爲鬼火攢。回看欲問一作首更尋一作故壘。地愁雲帶雨蔽層巒。

小園

緩步成語中。趣沈一作微吟足望裏閑。蝶我戲花我笑。任他作兒童看。

中秋

琪樹湛湛玉露。銀河爽爽金風。醉歌我出塵表。笑語入來月中。

無題(履軒臥友作題友人別業)

新楓三月紅葉。古石四時綠苔。涉園主人何趣。不速時有客來。

寄鳥山氏

人道醉外有何事。君道醉外有何事。人道吟外有何事。君道吟外有何事。吟中世界醉裏乾坤。恨無一路可通俗士。

題畫

夕靄滿山霧滿川。歸舟相逐曲汀前。村翁自有雨暘訣。坐致月朝江上天。

會飲五友軒和笠字

深春細雨宜相集。詩酒興酣闌一作忘俗習。況有梅花當戶開。不須謝屐與蘇笠。(竹山曰)深恐當作初看早

次彰信見賀五十韵

浪華府下壯爲老。勢似江流去不回。悔任迂疎過歲月。耻將凡近問蓬萊。知非徒誦籩家

法。言志奈無高適。才。豈料笙歌是日起。滿座

一作堂

和風映朱杯。

浪華客居

乾坤孤病客。無處不僑居。劇地風流少。新徙朋友稀。門前留海舶。月下讀鄉書。時復江河曲。躊躇獨羨魚。

中庸定本

君子之道。辟如行遠必自邇。辟如登高必自卑。詩曰。妻子好合。如鼓瑟琴。兄弟既翕。和樂且耽。宜爾室家。樂爾妻帑。子曰。父母其順矣乎。

右第十五章

子曰。舜其大孝也。與德爲聖人。尊爲天子。富有四海之內。宗廟饗之。子孫保之。故大德必得其位。必得其祿。必得其名。必得其壽。故天之生物。必因其材而篤焉。故栽者培之。傾者覆之。詩曰。嘉樂君子。憲憲令德。宜民宜人。受祿于天。保佑命之。自天申之。故大德者必受命。

右第十六章。舊第十七章。

至誠之道。可以前知。國家將興。必有禎祥。國家將亡。必有妖孽。見乎蓍龜。動乎四體。禍福將至。善必先知之。不善必先知之。故至誠如神。

右第二十三章。舊第二十四章。

子曰。鬼神之爲德。其盛矣乎。視之而弗見。聽之而弗聞。體物而不可遺。使天下之人。齊明盛服。以承祭祀。洋洋乎。如在其上。如在其左右。詩曰。神之格思。不可度思。矧可射思。夫微之顯。誠之不可揜。如此夫。

右第二十四章。舊第十六章。

誠者自成也。而道自道也。誠者。物之終始。不誠無物。是故君子誠之爲貴。誠者。非自成己而已也。所以成物也。成己仁也。成物知也。性之德也。合外內之道也。故時措之宜也。

右第二十五章。

算法示蒙

八

二除 十二石

三除

百十一石

四除

千五百石

五除 一万二千三百四十五石

六除

一万二千三百四十一石

七除 八千石

八除

十二万三千四百十四石三斗二升

九除 十一万千百十一石一斗一升一合

(以上竹山先生所編萬年先生遺稿)

失題

(以下詩文八篇及和歌俳句九首收于中井履軒先生所編襄陽帖)

襄陽海岳君。百事不襲人。馬賦如天造。拜石同接賓。狂態爲衆笑。適足見爾眞。書家蘇黃。蔡死生永占隣。

次楓岡君韻

一別參商萬里天。數莖黃白雙鬢。相逢只合銜杯酒。莫擬從來是幾年。

失題

勺水卷石居莽兩清。託千歲根見四時榮。

浪華津口留別諸友

盛夏華城多樂遊。行裝半擔向南州。別離何物好相記。港上花開紅石榴。

有感作

青松栖白鶴。共約千秋期。巖巖南山石。萬古如一時。云何瞬與菌。朝生不暮知。風晚戶外冷。入息莫復思。

庚寅五月同□□三輪二先醒及諸友遊茶磨山。

南薰陣陣可人衣。散步分蹊入綠圍。吟裏嫌爲禽鳥笑。林丘暮盡未知歸。

小集柳臯亭

一座友朋談轉熟。滿庭草樹綠逾濃。嘲來坡老亦奇語。興屬深春微雨中。

○

非客主無以立。非奴主無以行。已有主心是也。已有奴氣是也。而已有客物是也。故物可愛。不可虛氣可養。不可空夫心志者。所以帥氣而應物也。而客過焉。奴役焉。如其引物而留之。則客爲主。先氣而從之。則主反爲奴。可乎。是故君子所謂心。非氣變物化之謂也。物

物不物於物。氣氣不氣於氣。今天下之不以主爲客。奴爲主者鮮。吾道無他。主主而已。主
主則奴奴而客客盡矣。

閑中燈

ともしひに打むかふ身のさひしさをとへとも影はとひもかはさす

紅葉

紅葉のをうはしとのみなかめ來つおもへは木々のおとろふる色

暮秋

うしといひかなしきものとかこち來てくるれは秋をまたおしむらん

乙未鶴旦立春在翌

あすはまた春にもさらに逢坂の關のこなたに年は來ぬはや

○

遲吹の己は寒き木わた哉

泉石

さはつたら時雨しそうなみねの雲

眞男子ありや裏屋の紙幟

觀よ雪におれた處か竹のすゝ

花鳥のうしろすかたや淡路島

泉石

○(以下四篇收于中井履軒先生緩步帖、附識語二篇)

天下名山心上列。古先妙句口頭過。此言若能不空發。宇宙英雄屬自家。

世之所謂英雄者無他。求其所大欲者也。則屈於物而已耳。而謂之英雄可乎。故唯有與天下之利名而相遺者。然後英雄之眞可語。明道先生云。富貴不淫貧賤樂。男兒到此是豪雄。信哉。如吾人身與口不相似。可恥可戒。石菴

○
一念之覺。一事之悔。而欲發焉。其聲當吞不當吐。蓋吐者之氣散。吞者之氣凝。凝然不動。然後可與學。

○
香一炷。酒三杯。明月出。清風來。

萬年散人漫題自立齋

二三

世にそひてかきねと人をたのむなる身はあさましのあさかほの花
緩歩之帖。先師親蹟。散在諸家者。與誠之之所韜收。次男積德咸。探輯雙鉤。以筆填墨。
裱爲摺本。比諸唐樣打碑。亦不甚殊。卷末檻詠一首者。誠之弱冠時。命齋以自立先生。
偶來飲齋。小醉笑引机邊書帙。題詠以賜焉。白鬚酡顏。和氣可掬。語韻風丰。宛在耳目。
屈指數之。實四十年前事。人去而帙存。不堪悽愴之情。遂記授兒。云寶曆癸酉正月十八日。中井誠之謹書。

萬年先生之書。辟諸老梅槎牙。冒霜雪發奇香。倚峭壁巉巖之間。蓋取諸魏晉唐宋諸家萃而出之。使染指明季諸家者觀之。乃不瞠若喪膽者幾希。五井純禎謹識。

紫燕子花行

（以下八首收于荒木李谿大東昭代詩紀、但省與前重出者三首）

燕子花兮燕子花。此種在昔出誰家。久習人間桃李事。笑而不言意似夸。無乃赤帝子與黑帝子。邂逅太清離宮裏。玄酒興酣雲雨和。墜入九地出現紫。紫草從來亦多般。紫藤紫蘭紫牡丹。此花一出池澤邊。淡粧濃抹都如乾。畫工畫形不畫色。染工欲染染不得。況有

態度極婉。清揚倩盼。堪傾國。君不聞太平天子日萬機。勵精自瘦。要民肥。心蠱身狩。何所由。得非武后與楊妃。又不見建武。武臣臣義貞。振古壓卵。炫威名。却□兒女。絆驥足。機失鍊。覆賊復橫。燕子燕子亦自禁。吾非惡美惡妖淫。尙繫蔽第懲冶容。一生三從守冷衾。寄語洛陽少年子。堅制意馬莫使駸。

失題

鳥沒雲中影。花爲路上塵。晚風無限恨。不是惜餘春。

夏日

誰謂夏日長。回首見斜陽。用盡一扇手。拂蠅復取涼。

夏夜

餘暑在臥席。環廡皆蚊聲。誰謂夏夜短。反側未天明。

客中上已看桃花店

三月三日天氣好。故鄉他鄉桃花新。花情不解人情異。笑向遠人如土人。

失題

四十萬人修薦章。只有蘇洵姦論詳。人間萬事難早辨。角豆花短栗花長。

和河生大融寺作

一作和並河先醒
大融密寺看柳

娼家近在寺門東。絲竹磬鐘一作鐘聲。襍晚風。青眼如是。老僧觀翠一作老僧觀翠。柳不知世上紫兼一作酒顏紅。

其二

昔一作嘗聞阿字觀中士。今見眞言誦裏人。借問堂前楊柳色。老僧能負幾番春。

書稱呼辨後

以下詩文和歌等凡十一篇收于萬年先生遺墨帖

聖人所導人者。謂之名教。或者以爲名也者。言也。言也者。出於口而已。入於耳而已。以此爲教。其何貴之有。謬哉是言。夫名者實之表也。分之章也。是有功於名教也不小。故有名必有是實。知其名。可以知其分。天下之實。關焉。天下之分。係焉。此其爲物。不亦重乎。故聖人之出之也。於心。君子之入之也。亦於心。彼道聽塗說。以口耳學者。非吾所謂也。或者其未讀聖人爲衛之語耶。本邦近世師資輩出。其講明名分。不苟焉者。淺見先生爲最。云先生此辨。蒙士得之。可以自啓。流俗得之。可以自回。存心名實者。得之爲準。如其所未辨。

亦可以類推旁及。唯辨所及。稱國守爲諸侯。人相稱而所爲公者。愚竊謂是則未必可槩論。以其有是者。亦有非者也。先生復起。將有一說可聽。享保丁未秋九月。三宅正名實父稿。

世代

天神世次歌

國常立尊元之元。一名天御中主。尊國狹槌尊是帝子。豐斟渟尊爲皇孫。泥土煮兮沙土煮。自後四世用配。言大戶道而大苦邊。繼之面足與惶根。及伊弉諾伊弉冉。渾在天神七代論。

地神世次歌

天照皇德四表被。大日目名當時。以皇德帝業繼者誰。吾勝勝天忍穗耳。尊後爲瓊瓊杵尊。次彥火火出見是。至鷦鷯羽葦不合。則爲地神五代矣。

平野含翠堂にゆきたりけるついで、末吉の翁今すみたまふる寛容菴を尋ぬ、園の逕に幾むらの菊さきたり、

仙人のすみかもしらししらぎくのにほふあたりにたつねよらずは 正名

芳野山花

花故に思ひ置れぬ秋は又いかなる花をみよしのゝ山

よしのゝ櫻、紅葉花よりもめでたしといひし人あり、その山寺の僧は、

此谷峯の雪の日見せたらましかはなどいへりとぞ、

正名

冬菊

此草いつ比いつ方より出たりや、詩人とへば題名なしといひ、歌人とへ
は作例なしといへり、秋菊の花は、色形あまりおきくていひかたし、夏のは
形あひ同じけれど、色數あり、唯これは色皆黃なり、形も異ならて、藥内に
豊に、片外に儉にて、二時のとは似ざり、その葉あるはしきれの満^カかねて綠
にあるは霜のよく満^カて紫なれば、人のもてはやせること、唯その花の故のみ
にはあらず、世俗はよひて寒菊とぞいへる、此比友人と同じくその詩を賦し
たるついで、歌をもよみてみんとてかきつく、

時しらて咲とやいはむきくの花雪はまたらの庭のまかきに

正名

むかしは芳野龍田の花紅葉といへりしか、いまは龍田の紅葉みるへくもあらずなりぬとぞ、去年よしのゝ谷の花を見し、一目千本とも中の盛ともいへり、ことし高尾の紅葉、峯なる谷なる、皆みたりけるか、わきて面白うおほえたるは、水のほとりにそありける、むかしは此山この紅葉なかりけりや、ありても人しらさりけりや、その名所とも聞えず、よみたる歌も見へすとなん、立し名もいかて高尾の山ならんかゝる紅葉を人しらぬ世に

正名

水無月の水に臨みて・

年もはや半流れぬ御祓川

白牡丹をみて

中々に白きや花のふかみ草

正名

○

狀とゝき申候、皆々様無事にてゆさうおうの由珍重に存候、此方かわる事無之候、よそより此方へ見まひ來り候はゞ、申つかはすべく候、只今迄はみやげつかはし可被申様なる見まひも來り不申候、さたなし分にいたしをき候故にて候、其もと皆々風引不被申候様に、食あたりなく候様に可被成候、さかな玉子なととのへ用ひ可被申候、長兵衛殿にはべつしてしんじ候様に可被成候、ゆへ入り候事ひさしく候て、玉子さかなくひ不申候ては、ゆあたる事有之候、此よく長兵衛殿へよく傳へ可被申候、以上、

五月九日

二まわり入被申候て、いよく心よく候はゞ、三まわりも入被申しかるべき候、此通り皆々へも可被申候、もし外の衆あがり歸り被申候とも、入り心よく候はゞ、あとにのこり入り可被申候へと母へ可被申候、

此柳こりの内にとくさ色のきる物と、くしこりと入遣候、うけとり置可被申候、

才二郎殿

(春樓)

石 菴



土橋通節様

三宅石菴

其後御久敷以書狀も不得御意候、彌御家内御無爲御座可有奉存候、此方無異事罷在候、先年得御意候後、御宅之邊又類焼之様に承及候、左様にて御座候者、御難義察入申候、去年當地大火、手前宅も逢類焼、他所に立のき罷在、冬になり普請出來罷(二字飢)申候き、此度中井忠藏其御地へ被參候に付、其邊被參候はゞ、御尋可被申歟とて御座候間、如此に御座候、御内様へも可然御意得被仰可被下候、尙期後音之時候、恐々謹言、五月十九日

(右萬年先生遺墨帖所載。中井黃裳先生識語曰。是帖大正丁巳之春。獲諸書畫骨董雜誌社主井汲倉藏所設儒家遺墨展覽會。此井汲氏父芳野人大北桂峯舊藏。上市邑豪北村又左衛門所贈。北村氏遊讀之日獲之。云帖中所載歌文雜記共二十一有紙。蓋先生在讀之日任意手寫者。而門弟子收輯糊繕也云々。)

中江藤樹中和刻額書後

此中和二字。藤樹先生所書。讚木村氏得於豫人藏焉。或者以其巧拙爲議。余曰。先生之爲人也中和。而其所寫者中和。此謂自畫傳神亦可。乃眞文字也。如吾人作是字者。雖其工過鍾王半蔡。亦猶沐猴而冠耳。奈不稱何。是則先生之書之所以爲貴非耶。石菴記。

（右河内服部川神光寺所藏）

發句

つい聞けばきたなし庭は梅たらけ
眞白に直四角なり一作眞角
なるや藏の月

奢られて又わひらなく紙子かな

曉に乞食を見て

寐れはねにあの薦一重霜一重

酒かいふと端書して

飯蛸のいひとかたらむ身のむかし

(右五首收于浪華人物志)

喻叢序

(以下詩文及國風共七篇、中井黃裳先生所輯)

譬者何也。曰借彼以形此也。詩之有比。譬也。有興亦猶譬也。易之納約自牖也。譬居其一。何以謂之莊子曰。與以馬喻馬之非馬也。不如以非馬喻馬之非馬也。言者不可無也。此編抄書諸家譬語。余一覽有喜心。因附其說者然。雖然此物有寄諸信人。不可假諸佞者。蓋信人用之。以達其信。佞者用之。逞其佞也。二者之間。有可畏焉。何也。曰漢有譬語云。寧爲鷄口勿爲牛後。一義也。此有譬語云。與爲鰯首。不如附鯛尾之可愈。亦一義也。而其用必於佞者。不必於信人。故可畏。夫反信之謂佞。今余有喜心於此。編其果與信爲徒耶。與佞爲徒耶。享保壬辰冬。

余在京師。一日與諸先生同志遊圓山閣。次韻時將歸華府。

城東冬景似春華。徐步杖藜日未斜。戲劇連場起鼓笛。笑談幾處開窓紗。來看彫後泉頭樹。就弄傲霜石上花。山閣同遊知再復。晚風吹面望天涯。

戲用俚語祝

和田殿裏春富高麗橋前日月長。

己己己の歌に

(中井賣蓑云是は小野篁の歌を読み直したるものなりと)

みはつきてすこしつかぬはやむすてに皆離るゝはおのれつちのと

冬至

くみて知れ年の内よりとしきぬと岩井の水のそこの心に

○

秋の暮我から草けぶり草

如春齋の柿の圖に

世のことによこと見えけり桃と柿

石菴先生遺稿 終